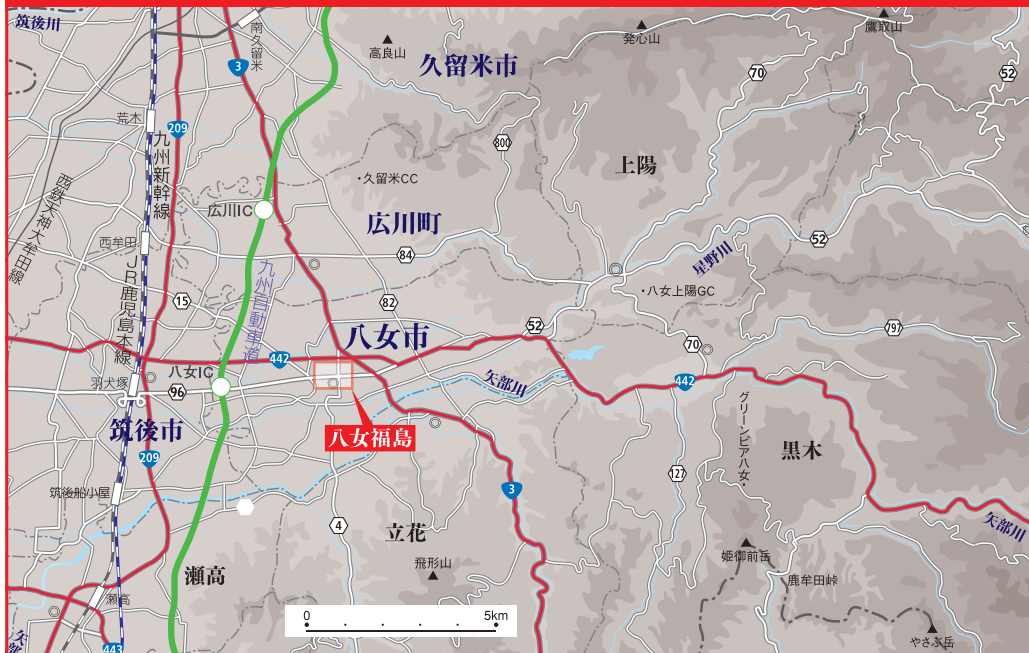


観る知る学ぶ 八女は楽しい



八女市茶のくに観光案内所への交通アクセス

- JR九州(鹿児島本線)
博多～羽犬塚下車(約50分)・堀川バス羽矢線～福島バス停下車(約20分)
観光案内所へ(徒歩約15分)
- 西鉄(福岡天神大牟田線)
福岡天神～久留米駅下車・西鉄バス福島線～福島バス停下車(約40分)
観光案内所へ(徒歩約20分)
- 高速バス
九州自動車道
八女IC下車・タクシーで観光案内所へ(約10分)
- 車
九州自動車道
八女IC下車・観光案内所へ(約10分)

茶のくに
八女・奥八女
CHANOKUNI YAMIE OKUYAME



華やかに舞い踊る「からくり人形」の世界

八女福島の燈籠人形

八女市観光振興課 TEL.0943-23-1192

〒834-0031 福岡県八女市本町2-129

華やかに舞い踊る「からくり人形」の世界へ

～八女福島の燈籠人形～

八女提灯で明るく照らされた舞台。三味線やお囃子の音に合わせて美しい着物姿の人形が熱狂的な観客の拍手喝采に迎えられて登場し、華やかに舞い踊る…。毎年秋に八女の福島八幡宮の境内で上演されている八女福島の燈籠人形は、江戸時代から続く不思議な「からくり」の世界。約270年もの時を超え、賑やかな祭りの夜を彩ってきた燈籠人形には、八女の人々の心を動かす情熱が今でも生きている。

【公演日】 「秋分の日」頃3日間

【会場】 福島八幡宮
(八女市本町105-1)



【沿革】

福島八幡宮の放生会に、人形の燈籠を奉納したのが「燈籠人形」の始まり。

明和9年(1772)には、浄瑠璃作者福松藤助(元福島組大庄屋松延甚左衛門)が大坂より帰郷。人形を動かす工夫や当番町制の上演に力を貸して以後、動く人形が登場した。それが、主役となり現在の「からくり人形」の基礎ができる。

弘化2年(1845)に久留米藩の大検令(検約規制)により上演が禁止されていたが、明治4年(1871)燈籠人形の奉納が復活する。以後、第二次世界大戦による燈籠人形奉納の中止期間を経て、昭和52年(1977)には「八女福島の燈籠人形」として国の重要無形民俗文化財に指定される。

【演目】

- はる げ しき ちく し がた な しまもうで
・春景色筑紫濁名島詣
- たま も の まえ
・玉藻之前
- よし の やまきつねただのぶはつ ね のつつみ
・吉野山狐忠信初音之鼓
- さつ ま はや と く に わか まるいつくしまじん じやもうで
・薩摩隼人国若丸殿島神社詣

以上、4つの芸題を、保存会で毎年順番に上演している。

※8、9ページにそれぞれのあらすじを掲載。

【燈籠人形の舞台】

八女福島の燈籠人形の舞台は、二階建て三層に及ぶ屋台。建物全体は金箔、銀箔や漆塗りで作られており、これは福島仏壇を造る技法の基になったと思われる。優雅さ精巧さは文楽の人形浄瑠璃に匹敵するといわれている。



八女福島の燈籠人形の歴史

【江戸時代】

慶長6年(1601)

田中吉政、柳川に本城を築き、三男康政に三万石を与えて福島城を大修復。
城下町の形態ができる(現 福島八幡宮氏子町内)

元和6年(1620)

福島城廃城になる。有馬豊氏が久留米城主(二十一万石)となり、
矢部川以北は久留米藩となる。

寛文元年(1661)

旧福島城下町民の氏神として、現在の場所に八幡宮を勧請。



延享元年(1744)

人形の燈籠を放生会に奉納
するようになる。

宝暦10年(1760)

福島八幡宮開元百年紀
に千燈籠を寄進。

明和9年(1772)

元福島組大庄屋松延甚左衛門、大坂から帰郷し、
からくりの技術を伝える。「からくり人形」の基礎
ができる) 当番町制による上演様式の確立。

安永8年(1779)

久留米城下櫛原町五穀神社内、天満宮勧請遷座祭
にて出張興行。全ての見物客から見料五文徴収。



大庄屋 松延甚左衛門が伝えたもの

弱冠21才で大庄屋を相続した青年・松延甚左衛門種茂は、幼年期に俳人若林宗元に俳諧の手ほどきを受け、既に14才の時に「霞(あられ)か」と取れば手に咲く薔(つばみ)かな」という句を作っていた。しかし翌年、飢饉と重税にあえぐ農民達による宝暦一揆が起こり、彼は自分の役職に深い疑問を持つようになる。25才の時、甚左衛門は官職を捨て大坂に出奔するという思い切った行動に出て、三年目の27才の時、福松藤助という筆名

で人形浄瑠璃作者としてデビュー。

それから39才になって福島に戻った藤助は、それまで動きのなかった燈籠人形を、動く「からくり人形」仕掛けに変えたと言われている。その後は俳諧の世界に身を投じ、俳人・橋雪庵貫嵐(きつせつあんかんらん)として多くの俳句や物語を残した。貫嵐のもたらした上方文化は、この地域の職人の才覚を刺激し、より高度な燈籠人形文化へと進化させたのだった。

弘化2年(1846)

久留米の儉約規制により奉納中止。
(大検令)

天保15年(1844)

藩命に従わず、燈籠人形を奉納した記録。

【明治時代】

明治4年(1871)

燈籠人形復活。西矢原町より「七夕」奉納。

明治5年(1872)

坂東三津五郎一座の唄方・玉村孫一や笛太鼓名人・木村などが囃子方を指導稽古、上方風に変遷。

明治13年(1880)

学者・樋口平舎、「玉藻前」作詞。
古池花鸚が燈籠人形の囃子長唄の台本作詞協力。

【昭和時代】

昭和18~21年(1943~6)

第二次世界大戦 戦時体制により奉納は中止。

昭和27年(1952)

福島燈籠人形、無形文化財として県の指定をうける。

昭和32年(1957)

福島燈籠人形保存会発足。

昭和52年(1977)

重要無形民俗文化財(第81号)として国が指定する。



昭和26年の公開屋台



昭和6年公開

(白黒写真は「八女福島の燈籠人形」 八女市教育委員会発行より引用)

燈籠人形の舞台

燈籠人形の舞台は、高さ8m、幅14m、奥行6m余りの二階建、三層構造になっている。



三層は下から、下遣い場、横遣い場、囃子場になっている。この舞台は「屋台」と呼ばれ、組立て、解体が自由できるように、一本の釘・カスガイも使われていないのが特徴。屋台の組立ては、上演の一ヶ月前に一週間程度で行われる。建物全体は、金箔・銀箔・漆塗りで出来ており、福島仏壇を造る技法の基になったといわれている。

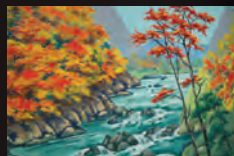
見物席は、舞台正面の高台とその斜面で、旧福島城の石垣の跡がそのまま利用されている。

【千秋楽の舞台】

最終日の最終公演（千秋楽）のみ、通常は板や障子で遮られて見えない一層や二層の楽屋、三層が全て開け放たれて上演される。写真は様子。

【背景】

物語が進むにつれ、舞台奥の背景が次々に変化する。専門職人によって色鮮やかに布に描かれた背景は、上演前には何枚も重ねて設置されており、進行に従って、一枚ずつ手前の布から下に落とされ、次の背景が現れる仕組み。



「玉藻之前」の背景



何枚も重ねて吊るされた背景を下から見上げる



普段の観客席。玉石が並ぶ斜面



観客に埋め尽くされる

【見物席】

屋台正面は、旧福島城第三郭の石垣の跡。その斜面を玉石でふき、野外観客席に仕立てた。高台は立見席になっており、上演時には、この高台と斜面が大勢の観客で埋まる。

【屋台と演題】

最盛期は十数台あったといわれる屋台も、現在は二台残すのみ。昭和39年（1964）以降「燈籠人形保存会」によって上演される演題（四つの演題を毎年順番に上演する。つまり、四年ごとに同じ演題が巡って来る）に従い、使用する屋台が決まっている。

【三層】

舞台上部では、三味線、太鼓、鼓などが演奏され、地唄が唄われる（囃子方15～16人）。通常の上演では障子に遮られて見えないが、録音ではなく毎回生演奏が行われている。



【二層】

人形が動く舞台と、舞台左右の楽屋から成る。舞台奥側の人形は、左右の楽屋から操られて動くもので、それぞれ6人ずつ、計12人の遣い手（横遣い）がここで人形を操る。



【一層】

板で囲まれた屋台の基礎部分。ここには、舞台手前側の人形を、舞台床下から糸の操作で動かす遣い手（下遣い）6人がいる。



屋台の組立ては、一週間!!

8月下旬、福島八幡宮境内に公演一ヶ月前から屋台が組み立てられる。木材等の屋台の材料・大道具・人形等は、普段は境内奥にある蔵に保管されており、この時期に蔵の扉が開かれる。



①いつもの境内。全くの更地



②組立て初日。クレーンを使って組み上げる



③三日後、ほぼ屋台の形になる



④公演当日の屋台

人形の上演

燈籠人形の上演は、人形を操る人形方や、唄や演奏を行う囃子方、演出の狂言方、衣裳方など総勢四十数名の協力で行われる。出演者は全て地元、福島八幡宮の氏子たちで、いつもは別の仕事や学校がある人たち(素人衆)だ。この時期、福島八幡宮に集い、燈籠人形の保存伝承を行ってきた。

人形を操る

舞台の人形には、動く人形(踊人形)と静止したままの人形(飾人形)がある。動く人形は、下遣いと横遣いの二種類があり、操り方が違う。

人形は、細木によって作られており、人形台に乗せられる。動く人形は、人形台に仕込まれた糸の操作で手や首が動く仕組みで、体の関節部分は鯨の髭をバネとして利用するなど、からくりの要素も取り入れられている。

よこづか 【横遣い】

舞台左右の楽屋から人形を操る。左手、右手、首、体などをそれぞれが担当し、左右の楽屋に6名ずつ、12名で人形を動かす。

舞台袖の见えない所から、長い棒を繰り出すと、人形台に取付けられた棒に触れ、それぞれに結びつけられた糸が屈伸して手や首が動く仕組み。

したづか 【下遣い】

舞台下で人形を操る。6人が、それぞれ手、首、体を担当するのは横遣いと同じ。人形の下から直接糸を屈伸させて、人形を動かす。人形の進行は、床に造られた溝を利用する。

【送り渡し】横遣い人形の見せ場の一つ。屋台の左側から進んできた人形が中央に来たところで受渡しが行われ、右側の楽屋にいる人(横遣い)によって操られる。この受け渡しの時に左右の呼吸が合わないと、人形は台車から落ちてしまう。「送り渡し」は難事中の難事、全国的にも珍しい妙技と言われる。

【素抜き】衣裳の早変わり。一本の三味線糸の操作で、人形は目にも止まらぬ早さで衣裳の早変わりを行う。実は、衣裳の縫い方に特殊な工夫がされている。

【囃子方】

舞台の上(三層)で、唄、三味線、太鼓、鼓などを担当する人たちは、「囃子方」と呼ばれる。総勢15~16人。

【衣裳方】

上演ごとに衣裳や顔などの早変わりが行われるため、公演の合間に人形の衣裳の状態を復元するなど、上演中の人形の衣裳まわりの世話をを行う。

【後見役】

舞台前面、左右に一人ずつ子どもたちが座る。市内の希望者が交代で務める。

唄・囃子

上演は、太鼓の音で知らされ、上演中は三味線、鼓などの囃子に合わせて人形が動く。舞台の上の障子の陰で観客からは見えないが、上演時はいつも生演奏。録音ではない。

燈籠人形保存会

奉納がはじまった頃は福島町各町内当番で上演された出しものも、現在は、毎年保存会で上演し続けている。



各演目のあらすじ

【春景色筑紫潟名島詣】

弁財天を厚く信仰する大名一行が従者を引きつれ、筑前・名島神社に詣でました。筑紫の潟は、やわらかな春風が差し込み、帆をあげた小舟はのどかに行き交い、その帆影は春の波間に漂っています。筑紫の国は春たけなわです。門前の茶店で盃を傾けていた大名一行は、春の情景に酔いしれ思わず盃が進み、いつのまにかまどろむのでした…。(夢の中…)

衣をまとった舞姫姿の弁財天が側近である十五童子のひとり金財童子を連れだち現れます。愛宕の宮、宮崎八幡、あるいは千代松原…。最後に名島の社に舞い降りて周囲に桜吹雪が舞い散るなか、弁財天と金財童子は、心ゆくまで社前で舞い遊びました。



【玉藻之前】

平安時代の後期・鳥羽上皇に仕える玉藻之前という大変な美貌の持ち主で才媛がいました。院の寵愛を一身に受けていましたが、実は尾が九つあったという白面金毛九尾の狐の化身でした。あるとき、清涼殿において催された管弦楽の折、不思議な出来事が起こりました。そこで陰陽博士安倍泰成にその正体を見やぶられ、はるか遠く下野国那須野の原に逃げ去りましたが追討の三浦上総介に討ちとられました。

しかし狐の怨霊は殺生石となって近くを通る人畜に危害を加えるようになります。その後、百年ほど経た後深草の治世、高德の僧・玄翁和尚がみ仏の力をかりて杖で殺生石を三度たたくとさしもの悪鬼も昇天成仏しました。



【吉野山狐忠信初音之鼓】

壇の浦の戦いで平家滅亡の功をたてた源九郎半官義経は、朝廷から兄・頼朝を追討せよとの命を受け、「初音の鼓」を賜ります。義経はこの鼓は一生打つまいと決心しますが、疑り深い頼朝は義経追討の兵を差し向け、義経は追われて大和国吉野に身を隠します。

ほどなく義経を慕う静御前が従者の佐藤忠信に守られ吉野まで会いに行きます。ところがそこにはもうひとりの忠信がいました。義経は本物の忠信を見分けるよう静御前に命じます。静御前はこの鼓を打ちますが、親狐の皮で張られた鼓を慕う子狐が、実は忠信に化けて自分を守っていたことを知ります。その孝心に打たれ、義経は源九郎の名を添えて狐忠信に初音之鼓を与えます。



【薩摩隼人国若丸厳島神社詣】

江戸時代のはじめ、薩摩国大守の若君・国若丸が戦の勝利とお家の安全を祈願するため、家老の新納武蔵守を従え、安芸の宮島に鎮まる厳島神社に詣でました。主従二人がその情景にひたっていた時、海中から五色の水柱が立ちのぼり、現れたのは厳島の尊い神の御姿でした。驚き喜ぶ兩人をさらに祝福するかのように、雅楽の調べとともに麗しき弁財天も現れました。厳島の神は戦での勝利を、弁財天はお家の安泰を約束するかのようにともにご神霊を現したのです。厳島の神威に感謝した主従は喜び、感謝して薩摩への帰路につきました。



八女の伝統工芸

江戸時代から情熱をもって伝えられ、発展してきた燈籠人形。その伝承のなかで、町の職人技術にも磨きがかかり、燈籠を作り上げる技術は、「八女提灯」を生み、人形や屋台の組立細工の技は「八女福島仏壇」へと繋がった。それらの伝統工芸の技術を、年間を通じて見学できる場所として、「八女伝統工芸館」「八女民俗資料館」「八女手すき和紙資料館」がある。

荘厳華麗な仏閣を夢見て 八女福島仏壇

燈籠人形の屋台の建築技術が大いに役立ったと言われる八女福島仏壇。もともと八女地方は古くから信仰心の厚い土地柄で、伝統のある寺が多く残っていた。

文政4年(1821)、指物大工の遠渡三作がある夜、荘厳華麗な仏壇の夢を見て思い立ち、同業者だった井上利久平、平井三作の両名に協力を求めて仏壇製造を志したといわれている。製造技術が確立されたのはもう少し後の嘉永年間(1850年頃)で、九州での仏壇製造の源流ともなっている。

仏壇の製法は彫刻、金具、塗装、蒔絵という加工の工程と総組立てに分けられ、全工程数はなんと80工程余り!木地、宮殿、彫刻の木工部分の一部を除いて、ほとんど手加工による伝統技法が継承されている。



竹と和ろうそくと和紙。産地は八女 八女提灯

燈籠人形にかかせない「提灯」。和ろうそくの原料である木蠟(燭蠟)、火袋の原料である和紙、骨の材料である竹、賀輪(がわ)の材料である木材・八女はこれら全てが揃っていた。

八女提灯(福島提灯)の始まりは文化13年(1816)頃に福島町の荒巻文右衛門によって作られた「場提灯」と伝えられる。主に仏壇用のものが多かった為、八女地方は盆提灯の産地として名声を博してきた。

明治に入ると福島提灯に対する需要が急速に伸び、吉永太平の弟、伊平が早描きの描画法を応用して、大いに製造時間と価格を低減。また、形状・絵画・付属品等も年を追って工夫改良を施し、一部は米国、英国、香港、インド等の海外にも輸出された。そして、福島提灯は八女地方全域で生産されるようになり、「八女提灯」と呼ばれるようになった。



燈籠人形の技術を支えた伝統工芸 八女伝統工芸館

八女伝統工芸館では、燈籠人形の技術を支えた八女地方の伝統工芸品を展示・保存。館内には日本一の大きさを誇る仏壇と石灯籠、日本最大級のジャンボ提灯をはじめ、手すき和紙や久留米緋、木工品、竹細工など、八女を代表する工芸品・民芸品を展示。匠の実演も見学することができる。工芸品の販売コーナーもあり。

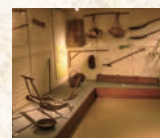
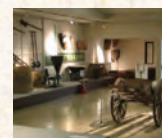


▲1F 燈籠人形屋台の実物大の複製。

燈籠人形をいつでも見られる場所 八女民俗資料館

八女伝統工芸館のすぐ隣。館内には燈籠人形屋台が実物大で再現・展示されており、屋台がどんな仕組みになっているのかが一目瞭然。屋台の裏側に回って舞台裏を見ることもできるので、複雑な人形の動きもバッチリわかる!ここを見ておけば公演の下調べは完璧!

このほか、八女市内に伝わる多くの民俗芸能の紹介や、四季の農作業の様子を描いた、江戸時代の絵図も展示。



◀2F 農業を中心とした民俗資料や八女茶に関する資料を紹介。



手すき体験もできる 八女手すき和紙資料館

八女提灯にかかせない八女の手漉き和紙は、九州で最も古く400年の歴史を持ち、文禄四年(1595)、全国行脚の途中に立ち寄った日蓮宗の僧・日源上人が和紙の技法を伝授したことに始まる。八女の手漉き和紙は引きが良く、コシが強いことから愛好者が多く、版画家棟方志功もその1人。この資料館では原料づくりから和紙ができあがるまでの工程を見ることができ、体験ができる。



八女の
伝統工芸を見に行こう

「燈籠人形とその技術が、いつでも見られる場所」

八女伝統工芸館
には、八女民俗資料館、八女手すき和紙資料館が併設されている。

DATA
八女伝統工芸館
〒834-0031
八女市本町
2-123-2
☎0943-22-3131
【HP】
<https://yamedentoukougeikan.jimdo.com/>

情緒あふれる
八女・福島の町並みを
歩いてみよう！



八女福島の白壁の町並み

【国選定重要伝統的建造物群保存地区】

八女福島の町家は土蔵造りが多く、商家的な色彩と職人の工房的な色彩を併せ持った、江戸、明治、大正、昭和初期の伝統様式の150軒ほどの建物が旧往還道路沿いに連なっています。

